北潮

第七號

▲目　次▼

れもい（短詩）……福田紫雲
開き文（書簡）……川上櫻翠
君なれば（短詩）……立田紅翠　山本明星
清興（短詩）……與原碧雲
石吹く風（短詩）……松江支部
七夕（美文）……中村荷影
白藻の影（短詩）……濱田支部
流れ藻を讀む（扼評）……河野翠激
ほの見し日（短詩）……高瀬淡嶺　米村水聲
金銀花（紀行）……增野翹白
俳句……立石洲洋
編輯餘言……
新刊寄贈……
戯（短詩）……藏田二葉　河野翠水　大屋桂水

第八號
明治三十八年九月一日發行

れもひ

福田紫雲

『れもひ』なき胸にやさしうひゝきして寢ねられぬ夜のうた聽きたまへ

火の中に棲むとし君がのらさずば求めて何におもひやはらぐ

われとわが胸に問ふ間の暫らくはこの手罪ぞとのたまはぬべき

琴の手は妙にみ髪は風にふき夏うす月の頬へながれける

うすづきは軒に近うてしら雲はみなみへ消ゆる眞夏たそがれ

開き文

櫻翠

文藝雜誌の公刊を持續するの困難は何處もおなじなれど、地方に於ては一層の事と存候然るによく一年を保ち將來益發達の意氣ある本誌を拜し、大兄が御熱誠の程改めて感じ候

再三精讀いたし候處散文評論などは小生の如きもの是非すべきにあらざれど、短詩のとりどりにすぐれてめでたきは最もうれしく、之によりて刺激せらるゝこと無量に候。中にも兄が『遠つ世』『紺青』『あかつきや』を好み、其外には山木明星氏、前田木風氏、福田紫雲

氏、碧雲氏、米村水聲氏、立石洲洋氏、立田紅翠氏等の御作中各一二首づゝうれしきを見いで候。嚴正なる文藝批判の上より申さば、他に幾多のすぐれたるものあらんも、小生の嗜好の上よりは如上に候。唯惜むらくは、舞姫、光琳、江戸むらさき、宵祭り等の文字入りたる諸作は、成功の域を去る頗ぶる大なりと信じ候。此の如き文字を以て完作を得むとするは、徒づらに苦心のみ多く美果は得がたく、われ等が詩社に於ても晶子女史唯一人成功したるのみに候、他は悉く失敗と申して過言にあらず候。偏に作家諸氏の反省をねがひたく候。斯くいへば、困難なれば止めよと申すにあらず『銀鈴』誌上に拜見したる以上に細心の研究を願ひたしといふ意に候。又大兄に申上げたきは、短歌の誤植に注意せられたき事に候。大兄の御熱誠に對し態と苦言を呈し候頓首——、これより千駄ヶ谷の小集にまゐり怪氣焔を吐く所に候。（七月五日）

君なれば

立田紅翠
山本明星

ほとゝぎす哀歌さびしき一律を楠の大樹の斧に秘めける

力なしほのぼと燃ゆる火ならねばよそながらこそ君を戀ひにけり

母の乳にまろく生ひてし君なればいのちのかぎりよき戀をもて（以上　紅翠）

更けぬれば笛のやうなる夜の神の歌はがらかにせゝらぎぬ水

われはみ歌誦せばゆらぎぬ魂と魂百合もゆらぎぬ天よぶ歌に（以上　明星）

清興

初めて雜誌「銀鈴」に接して

碧雲

白銀の鈴のひゞきに我しらずしたひ
よる子の頰のさゝ笑み。

みどり葉の葉ずれのさやぎ人知れず
夏の女神に袖ふれて見し。

山の氣のそびらにせまる心地して鈴
のひゞきに人しのばしむ。

れちたぎつ岩根たばしる眞清水のひ
ゞきに似ずやまな兒銀鈴

○增野翅白兄と語る

紫雲

みなさけや訪ひこし君に泣かれぬる
うたなき友の才をあはれめ

石吹く風（新涼會 松江支部）

金本征帆

才なきを悔いぬされどもむちうちて
み袂とりて從ふべきや

福間如舟

けうとくも世つかぬ庵と僧都笑みぬ
秋なり君に紅き葉たかむ

坂本笑風

手燭して牡丹剪るとてとき色の袂す
ゞしき夜の景色かな

久保田双蝶

岩こゐてたゞる磯回の藻の花の白さ
いかにと言問ひなれぬ
このもだへ胸にしふかく秘めたれば
神知りまさず君も斯くまた

中津峰秋

袂とりて母はいくさに死ねといひぬ
この太刀佩きて死ねやといひぬ
年若き妻がたもとも美はしく五月雨

晴れて葵咲きける
おん神のみむるはいとも嚴かに青葉
めぐらし虹とこ卷きぬ
夏の山夕越ゐくれば水の里若葉の里
と名負ひし里や

立石洲洋

やさ眉のひそみまたなく艶なりと青
葉がくれにさゝやきし人
胸のれもひ我とおほひて野に立てば
石吹く風も面白きかな
うつし世に戀成らざりし魂ならば星
のひとつよ紫に射せ
ひと知れず涙戀ふるや少女子の掬ば
ば滿ちむ胸のさかづき
風薫る袖師が浦や松の間に君を乘せ
たる白帆うかびぬ
百合折ると水をわたりて岩根道君を
まねきぬ櫨若葉かな

七夕

荷影

あさとく起きて、稻の葉に宿れるつゆの、白玉うけてかきし短冊は、妹等の手によりて、はや笹の葉につけられぬ。

ことしはよろづれとなぶりて、妹等にまかせしに、時をへてれいの如く、庭にかざられつ。机には、くだもの、きりの巢に歌かきたる、さてはみあかしなど、くれ〳〵の用意とのへぬ。

日はくれんとす、椽にむしろしきて、てゝにたのしき夕げのまどゐはひらかれぬ。ゆふ方水かへし金魚の鉢、星にたむけしみあかしの影をうつして、愛らしき笹の葉ずり、たんざくの風にゆらぐなど、いと心地よし。

談笑のうちに、つねよりもいとゞしたしくむつびつゝ、ゆふげをへてさて、みそらをあふげば、星きら〳〵ときらめきて、いとうるはしきさまなり。星のみやゐいかに、うたげ

のむしろやひらかれぬらん。いでやこゝにも、針と五色の絲持ち出でゝ、この光りにふるきためしの、ならはしをものせんかな、星まだ美くしくきらめき、きらめきたり。

白藻の影（新涼會濱田支部）

伏谷柴雨

なになれば君がみ歌になかれぬるそぞろ棹さす初夏の川

松本泣花

鷗舞ひ茜にはへる夕潮に似たるをもひと鳴れ胸のうち

河野素陽

白沫のとび散るがごとこの思ひれはみ心をさわがせまつる

後藤孤星

春の夜の鳥羽繪に似たる人ふたり京路に見たるうす月夜かな

五月雨の灯影ちひさく宵ふけて花はの白き山やどりかな

増野翅白

うつゝなうみかげしたひてさすらひぬ七年若きれもひもねてはなつ花の白きめぐらし殿たてゝ慢幕うちて君を舞はせむ

み手とれば白藻のかげのみなそこに君がやさしき瞳うつりぬ

『流れ藻』を讀む

翠激生

飯塚雲水氏自ら著す所の『ながれ藻』を贈らる。君は曾て我新涼會に稿を寄せし人、而して久しく余と文を通せし友なり。今日君が著を見るに及んで、歡こび何ぞ極まらん。手にするや、清讀一過ために涼味頗ぶる余に快きものあり、聊さか君が高意に酬ひんとして筆を執る、間々禮を欠ぐものあるべしと雖も、君亦諒として可なり

打見たる表裝の沈淡愛すべきは、やがて君が資性の表彰なるなからんや。君は謙遜の態度を其例言に示し『小學兒童のため些少にても裨益する所あらば望外の望なり』といへり。余が忌憚なき批評を許さば、余は先づ君が例言の恐らくは事實なるべきを信ぜんとす、何となれば、卷中其多くの作が、毎に教訓を含み、眞個文藝好愛者としての精神を見出すに苦みたれば也。試みにその新體詩を見んか、『教訓』『名を刻む』『管公の歌』『辛苦の曲』『蟹』『麗しき家庭』等、孰れか教科書中のものならざる。若くば『御國の光』『嘗膽臥薪』『勝利の色』『戰後の原頭』等、是等は既に大和田建樹先生あり、故人外山正一先生あり亦何ぞ君を煩はさんや。

然れ共、余は亦君が獨特の才を認むるに足る數篇を得たり、曰く『一日紀行』『品性の氣力』『春愁』『寧樂の里』及短歌中の四五、俳句中の十數句等。『机上日記』『亡友を悼む』の二篇亦別種の趣味を有するもの、如く、余をして忘れ得ざらしむ、況んや紙質の良好と躰裁の瀟洒とは、永く感興を曳けるをや。

妄評一文今更に省みて、君が坦懷に見んことを望む也、多罪。

はの見し日

高瀬淡嶺
米村水聲

○

透き綾の帳のうちにたつ人をはの見し日より戀ひそめにける

百合の香をゆかしみ草にぬる宵や櫟木立に青鵲ながる

水樓や霄蘆もれてすゞ風の宵寢の人の髪ふきにけり

月夜よし草の戸君が訪ひまさばうちにとまをせ門の水雞よ（以上　水聲）

○

繪行燈のざれ繪の謎に人かへさず旅

のやかたの夏の夜更けぬ
あらゝぎや月にさびれしいく年を怪
鳥廂に美し巣つくる
楡の香にしばし髪とく若き君と野を
ゆく我に吹く青あらし
石ぼりの女神天華の香にゑひて夢み
るごとき夕月夜かな（以上　淡嶺）

金銀花

増野　翅白

（一）

唯今平安丸にて、船路に向ひ申候。愚作のご批評のぞましく御座候。
夏の海の朝景色美くしう媚を呈し居り候——
——濱田より。

（二）

一昨日の船中、劍山、高松なぞを遙かに望みつゝ、舟の遠く霞みゆく方より、徐かに上りくる白帆のかげ、一帆去り又一帆去る景を眺め候。昨夜は市中散歩、中の島パークあたりの納涼臺……幾千の灯かげ美くしう水にうつりてちら〳〵と輝やける、げに床しく候ひき桂水素陽諸兄へよろしく……明日よりいよ〳〵大和めぐり——大坂より。

（三）

大極殿銀閣寺清水寺にあそび候。かの清水に鐵幹氏の『れひたち』を思ひ出でゝ、『女房二人に手をとられみ堂にのぼる春の晝』なぞ一しほふかき感興を覺へ候。あゝ古りし山、古りし水！——京にて。

（四）

これは本日ステーションで買つた新聞の附錄に候。京の鴨川の納涼ひとしほの詩趣あり、

橋すゞみ元祿ぶりの艶にして紅き灯
かげは水にうつりぬ

なぞうなり候。これより春日大佛へ。——
奈良ステーションより。

（五）

お手紙難有頂戴いたし候。今夕福田紫雲兄を

おとづれ候つもり。これはスケッチには無御座、やきなほしと御覽被下度候。五日頃滊車で後樂園も見てゆくつもりに候。——涙華にて。

（六）

小生京見物も終へ、本日歸濱致し候。三日紫雲兄を訪ひ申候て、色々ご高意にあづかり申候。——濱田より。

○　洲　洋

送別の俳筵開く蚊遣かな（征師兄を送る）
水　浴びて　輙ち晝寢したり　鳧
白蓮や　曉の星　冷やかに

▲銀鈴社維持費

其後左の通り惠まれたり、感謝に禁へず

金五　拾　錢　某　君（盛　岡）
金拾　七　錢　某　君（八　束）
金參　拾　錢　某　君（飯　石）
金參　拾　錢　某　君（石　見）

△本誌は第九號より大刷新を行ふべく、其如何なる躰裁に於て現はるゝかは次號に詳しく豫告すべし。
△新涼會々友金本征帆氏は上海同文書院に入學、藤田冠溪諏訪碧葉二氏は召集によりて入營せり。
△次號は十一月一日發行、〆切十月五日。
△次號より短歌小評を試むべし投稿を待つ。
△豫告せる『短歌零話』は既に出版せり、近く會友の手になる詩集及び短歌評釋等をも續々出版の計畫あり。

▲編輯餘言

▲新刊寄贈

□二葉文學（第一號）　松　江　二葉文學會
僅かに三十頁の小雜誌也「發刊の辭」の美はしきに反して中味は甚だ平凡雅氣なり健全に發達せんことを祈る
□少女新聞（二ノ七）　東　京　淺草少女敎會
小學校の兒童にはやさしくて面白き雜誌也
□卿　笛（三ノ七）　松　江　碧　雲　會
俳諧雜誌中やゝ頭角を現はせるもの也「推の本花叔」「餘白錄」「子規遺墨」「看板文學」等嬉し、短文はイヤ也
□五　月（二ノ一）　名古屋　五　月　舍
躰裁の珍奇なるに驚きたり俳句を中心とせる雜誌なれ共句は未だ精選せられざるもの〻如し
□國　詩（第　五）　東　京　國　詩　社
本誌は泣菫有明藤村諸氏翼賛の下に橋村旺洋等の編輯する所其詩形の清新なるは他の文學雜誌中多く見ざる所也第六號より「にひしほ」と合同する由なれば更に一段の光彩を發揮すべきか
□若　草（第　二）　出　雲　若　草　會
□衞生談話（五ノ七）　東　京　衞生談話會

相乘りて桃みちよぎる馬車の人物つつましうかはしぬと見る　藏田のぶ子

はげいとうや時雨に似たる風の音に君を怨じて泣きし日もあり

百合の香やおばしま近うさもらひてかせ待つ人のよきかたちかな

ほの白く花に雨するあかつきをなら　河野岩雄

びてれはせ秋の人ふたり

風そよと戸をうつ宵の山やどりちひさき君が息も秋なり

秋風やよそへて君も戀ひまつる紫苑とよぶに秋かせふきぬ

あさ霧やむらさき小茄子うるはしうよき夢見てかほゝゑみにける　大屋左一

れん國にひゝけと強う皷やうたむつ手のちから弱しともまた

雨の日を君れどろかし歌強ひて牡丹なりぬとかざしかへらむ（翠瀲に）

◎廣告

五月

二月十二日發行

△記事、俳句を中心としてあらゆる文學に及ぶ
△文章俳句投稿は總て着するに從て掲ぐ
△十句集を募る、殘暑十句、九月一日〆切、五月宛にて可
△發行所、名古屋市白山町六十六番戸

五月舍

文學雜誌

わかば草

一部前金五錢

第貳號目次

●白日夢……河野翠瀲
●夕雲……本城秋雨
●百合籠……耕烟
●雄力……大屋桂水
●戰爭漫吟……雪江
●白藤……狩野梅南
●逝く春……佐々木春濤
●神よなぞ……山本明星

發行所　若草會
出雲國大原郡大東町一七四四

河野翠瀲著

短歌零話

全一冊拾五錢　郵稅貳錢

新派和歌とは何ぞや。如何にして作るべきか、將た解すべき乎。本書の之を說く親切なりといふべし

製本既成

發行所　石見國邑智郡田所村　銀鈴社

明治三十八年八月廿五日印刷
同　年九月一日發行
（隔月發行）
（一部五錢）

島根縣邑智郡田所村大字下田所七百三十二番地
編輯兼發行人　河野岩雄
島根縣飯石郡赤名村大字赤名八百三番地
印刷人　木村柳三郎
島根縣邑智郡田所村
發行所　銀鈴社
石見國濱田町榮町
取次所　共榮堂
出雲國大原郡大東町
取次所　芙蓉堂

銀